

落ち際のアフォーダンス・集散のレジリエンス

－縄文時代における「想知領域」との向き合い方を再考する－

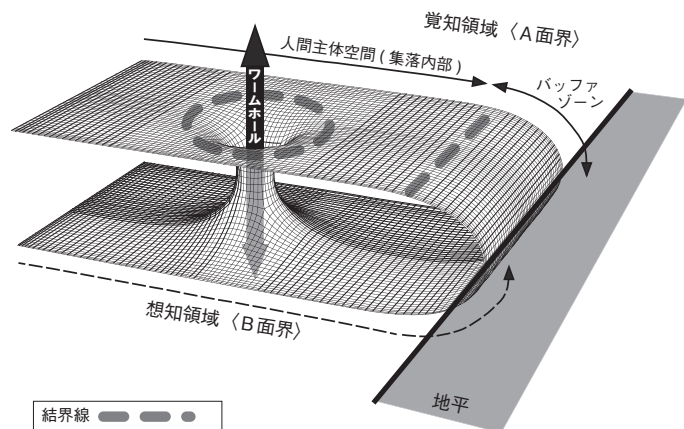
村上 拓

前稿（村上 2024）で示した廃絶遺構凹地等の「落ち際」がもつ意味について、生態心理学の観点から再考する。「想知領域」は絶対不可視の「不変項」であり、その存在を暗示する「アフォーダンス」は遮蔽構造と影に潜在する。アフォーダンスの複合と多義化によって「物語」は充実し、空間を演出する儀礼装置や儀器を介して、想知領域（＝環境）への働きかけはより主体的・能動的になっていった。この過程における自我（帰属意識）共有単位の細分化が、大規模集住形態の解体の主要な背景となったと推察する。縄文時代の「集住→分散」のサイクルは、「被災地社会」が復興に向けて歩む過程とよく類似する。外的脅威と対峙しつつ環境との調和が漸進する過程の「意識」の変遷は、「レジリエンス」としての心理的適応の経過と評価できる。

はじめに

筆者は前稿（村上 2024, 以下同）において、盛岡市芋田沢田Ⅳ遺跡の縄文時代中－後期移行期の遺構群に検討を加え、竪穴住居やフラスコ形土坑等の跡地に生じた凹地が求心力を持ち、特に墓と目される後続の遺構を引き寄せている状況に着目して、これらが異領域に通ずる連絡口（「ワームホール」）と見做されていた可能性を指摘した。またこれをもとに、縄文時代人にとっての世界は「覚知領域（A面界）」と「想知領域（B面界）」からなる二元構造を成し、このうち覚知領域は人間主体空間である集落内部と、その外側の地平までの範囲（「バッファゾーン」）に分節されること、さらに両者の境界となる集落の外縁部もまた、集落内部の凹地周縁と同様に強く意識される「結界」として意味づけられていたとの見解を述べた（第1図・註1）。

しかしながら、筆者の粗末な経験的観念に基づく解釈では、凹地の周縁や集落外縁の落ち際が縄文時代人の視点からどのように見え、そこから何を受け取り、さらにその先の見えていないもの（想知領域）とどう向き合ったかについて十分に説明できたとは言い難い。本稿はいわゆる「アフォーダンス理論」を頼りにこの課題を再考し、無数に開いた舟底の孔を、兎にも角にも指で塞ごうとする試みである。また同様に前稿で論じた「集住と分散」の意味するところについても改めて考える機会としたい。



（村上 2024 第 22 図を改変）

第1図 覚知領域←ワームホール→想知領域

1 「落ち際」の意味とカー生態学的観点から－

（1）ヒトは環境のどこにどう引っかかるのか－アフォーダンス理論の考え方

「知性」の解明において長く主流の座を占める伝統的な「刺激－反応」図式の限界を看破し、新たな概念としてアフォーダンス理論を提唱したのは、生態心理学者の J.J. ギブソンである。

アフォーダンスとは「環境が動物に提供するもの、良いものであれ悪いものであれ、用意したり備

「えたりするもの」(古崎他訳 1985,p.137)であり、「動物の行為のリソース(資源)」となるものとされる。そして、生物の周囲は潜在する「意味」の海であり、動物の行為はアフォーダンスの充満する環境においてなされるのだという(佐々木 1996,p.63)。最も強調されるのは、情報は環境の側にこそあるのであって、観察者(動物)が頭の中で作り出したり組み立てたりするのではないという点である。

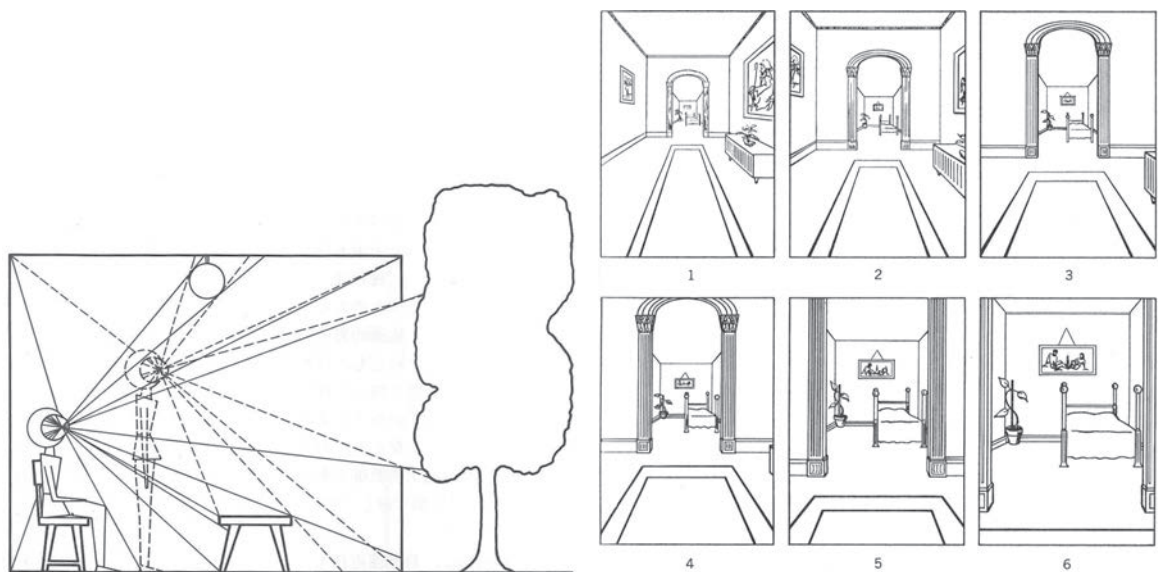
この理論の基盤となっているのが「生態光学」であり「包囲光配列」の概念である。光源からの放射光は「地面」や物質の「面」およびその「肌理」の凹凸に反射・散乱して「媒質」(空気や水)中を満たし、「包囲光」として観察点(観察者の眼)を360°取り囲んでいる。周囲の面のレイアウトに由来する包囲光の構造が「包囲光配列」であり、この配列は観察者が動き視点が移動することで変化する(「遠近法構造」)。この構造の変化から環境内の「不変項」が特定されていくのである(第2図)。動物は、動くからこそ切れ目なく視点を移動させ、それに伴って生じる可逆的かつ規則性を保った見え方の変化から、環境内の不変の実像を把握しているということだ。

川村久美子は当該理論の意義を説く論考において、動物は「環境変化を知覚し、それに合わせて自らの行動を調整する」のであり、「環境に適応したかたちに行方を導くのが知覚の役割」で、「行為の実行は更に新たな知覚を引き出す」と述べている(川村 2001)。また河野哲也は次のように言う。「生態学的アプローチでは、行為者が知覚した潜在的アフォーダンスをどのように集めて意図を形成しているのか、そして行為を開始しながら、環境中のさまざまなアフォーダンスをどのように利用しているかを、繊細に記述できる。あるいは、さらに行行為者が環境を改変して、自分にとって有益なアフォーダンスをどのように作り上げているのか、行為の過程における創造性を評価できる」(河野・田中 2023,p.76,下線筆者)。

観察者・行為者たる「動物」は、本稿においては人間である。人間の行為とその背景を考古学的事実から解明しようとするのに際し、併せて生態学的観点を持って臨むことは、上記のとおり目的を同じくする点からも意義がある。以下、本稿が対象とする「落ち際」の意味について考察を進めたい。

(2) 覚知領域における面の配置とアフォーダンス

筆者のいう「覚知領域」は、観察者としての人間の足元から地平まで、視認可能な空間すべてが該当することから、生態光学の適用範囲にそのまま対応させることができる。縄文時代人が自らを取り巻く「環境」から何をどのように受けとめ、そして如何にして次の行動が引き起こされていったのか。



観察点と包囲光配列

ある景観から他の景観への光学的変形

第2図 包囲光の構造から特定される「不変項」

これを考えるにあたり、まずは覚知領域における面の配置と構造を分析してみよう。

第3図は覚知領域を構成する面の配置および面の変換点を大まかに例示したものである。図右半は人間主体空間（主に集落内部）の外に広がるバッファゾーンで、それぞれにアフォーダンスを潜在させた自然物が主体となって展開している。遠景では地形上の起伏や植生の相違等による肌理をもとに、面とその縁が認識される。またそれぞれの面は、より小規模の面からなる構造を、幾重もの「入れ子」の状態で内包している。ここに分け入って活動する客体としての人間にとっては、大小の「正」と「負」のアフォーダンスを特定していく（身の保全を図りつつ利用可能性を探索する）舞台となる。

一方、図左半は、安定した不変項で構成される人間主体空間、集落内部である。人間がそれぞれに意味を与えた場と構築物が展開する、意図的に構造化された空間である。そして図のとおり、本稿の検討対象である廃絶遺構凹地と集落外縁部もまた同空間に所在する。

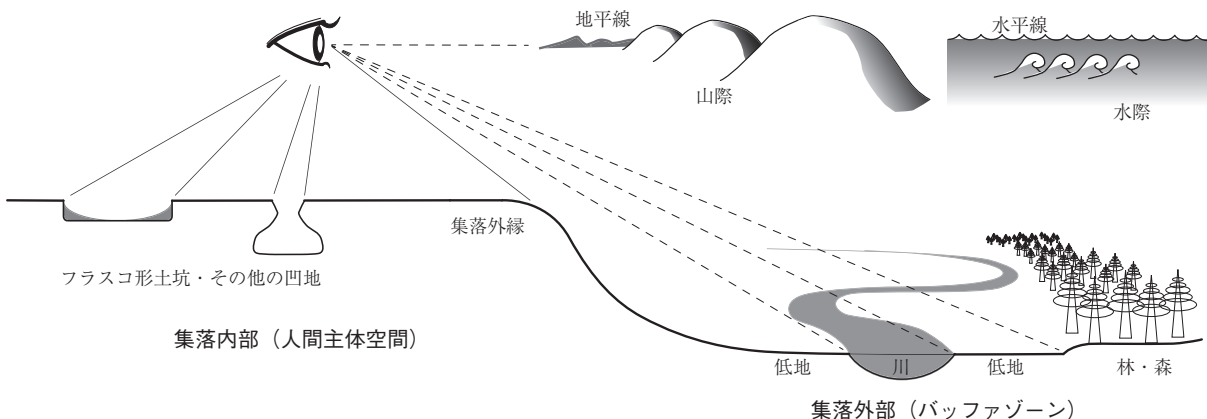
凹地開口部や集落外縁は「面の縁」(edges)として知覚されただろう。落ち際はギブソンのいう「遮蔽縁」に該当する（註2）。遮蔽縁とは、後方の面と重なった前方の面の縁である。彼によれば遮蔽縁は「世界に奥行きがあること」を示し、さらに「表面の背後に表面が存在すること、すなわち、隠された表面が存在し続けること」を示すという（佐々木他監訳 2011,p.233）。引用部の字面には意味深長な響きを感じられなくもないが、ここで語られる背後の面とは、単に凹地の内壁面・底面や、集落内部の平坦面の外縁の下方に連続する斜面のことであり、環境の不変項としてその存在が特定されるシステムを説明しているに過ぎない。

だが、この縁に見出されるアフォーダンスを考えてみるとどうか。「(自ら)落ちる、(何かを)落とす」であり、また逆に下方から「(何ものかが) 這い上がる、(何かを) 放出される」、あるいは自分が「引き込まれる」などが挙げられるだろう。落ち際から直感的に得られるアフォーダンスとしては「負」の要素がより濃厚に潜在すると考えられるのである。基本的には主体的な制御がなされている集落内部の空間において、住人らはこれらの不穏な存在（集落外のバッファゾーンでは高頻度で出くわす類のもの）と同居する状態にあるのだ。やはり落ち際は深長な意味を宿していると筆者は考える。

（3）不可視の不変項としての「想知領域」

《見えないところを埋める「物語」》

ギブソンは遮蔽には可逆性（註3）があり、可逆性によって環境内の物の永続性（不変項）が特定されると説明している（註4）。これに付け加えるように、E.S. リードは、環境内には「見えないもの」があることを指摘する。「視野そのものの縁が隠すもの」と「空の彼方に隠されているもの」の二つである。絶対に、永遠に「見えないからこそ、その見えないところを埋めるために、これほど多くの物語が生み出されてきたのかもしれない」（細田訳 2000,p.130-131）。見えないが確かに存在する。だ



第3図 覚知領域（A面界）において認識される「面」の変換点

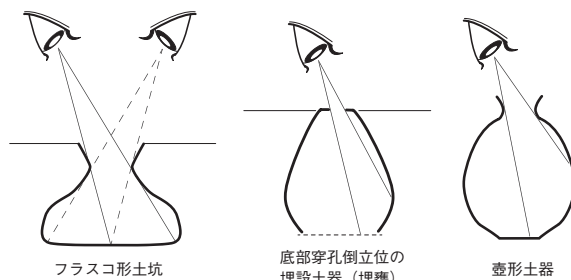
から埋められないことには世界（縄文時代人にとっての環境）が成立し得ないのである。

物語が存在を説明するもの、それが「想知領域」である。不穏なアフォーダンスから物語が生まれ、その物語をもとに、より多義的にアフォーダンスが派生・複合していく。そうして物語は厚みを増し、想知領域の存在はいつそう確かなものとなっていくだろう。そうであるなら、アフォーダンスが知覚させ、物語がその存在を定義する想知領域は、環境における「不変項」の一つに位置付けることができそうだ。どうやっても見えないという点において、その存在は不変なのだから。

遮蔽の可逆性は「背後にあるものの意識、および対象の向こう側と手前の側との一体性の印象」（古崎他訳 1985,p.217）を生じさせ、「隠れたものは、現れているものと連続して」いるのであって、両者が「つながっている」（同,p.224）ことを理解させる。想知領域は、こちら側である覚知領域と一体となり、ともに世界を構成している。よって、人間主体空間を安定的に存続させる不変項と、想知領域という不可視の不変項との間に位置する「落ち際」は、両者の結界となる。異なる領域を切り分ける境界であるとともに、文字通り、両者を結ぶところなのだ。

《形態上の遮蔽による不可視部の意味》

不可視部に想知領域を識るのだとすれば、特に内湾する壁面を持った形態の内部には、遮蔽縁の奥に生じる不可視部に、その存在と営力が意識されたと考えられる（第4図）。開口部はワームホールへの入口であり、その縁が結界となる。内部は通常は真っ暗な闇だが、見ようとすれば見ることは可能であろう。だが包圍光が十分に及ばない暗く曖昧な空間である。決して見えない想知領域の端部に、局所的に生じたバッファゾーンと見做すことができる。結界を越えてバッファゾーンにあるものは、いずれ想知領域へ引き込まれていくと考えられただろう（第5図）。

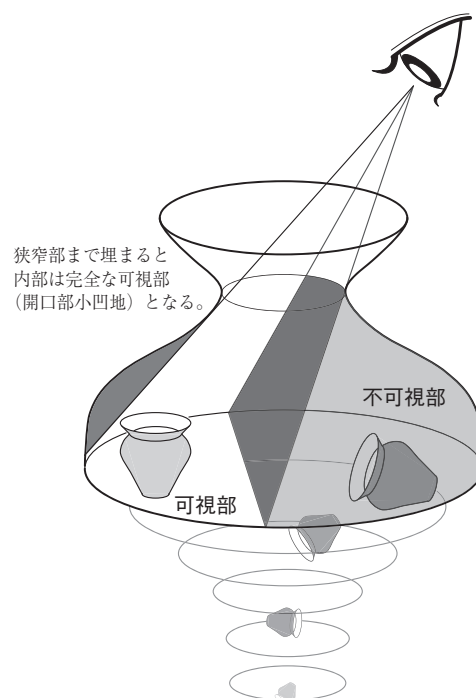


第4図 想知領域の存在を想起させる「不可視」部分

筆者は前稿で、盛岡市芋田沢田Ⅳ遺跡における「埋められない墓」としてのフラスコ形土坑の堆積過程を検討し、堆積開始段階の底面付近と、開口部付近まで堆積が進み小凹地化した段階に、儀礼関連とみられる人為痕跡が集中することを指摘した。

前者は、まさに葬送対象を内部に納めた段階に相当する。底面中央から大形礫が出土する事例に加え、底面壁際からの遺物出土事例が目立った。狭窄部を経由して流入する最初期堆積土は底面中央にマウンドを形成するため、壁際は相対的に低く落ち込んだ状態となる。また壁際は開口部の縁に遮蔽される不可視部でもある。対象を円滑に想知領域に送るために、「より深い」または「より見えない」壁際が選ばれたのではないか。

その後、堆積が進むと開口部付近は小凹地



第5図 不可視部に生じる想知領域の力の作用

化する。ワームホールは塞がれて不可視部は消滅する。想知領域の営力によって対象が引き込まれるプロセスが終わったこの段階には、石皿や鐸形土製品等の出土が確認されている。あたかも「弔い上げ」の儀礼が行われたかのように、である。

このように、不可視部の状態の変化を見極め、時間の流れの中にふさわしい機会をとらえて、葬送の最初と最後の段階にそれぞれ意味を持った儀礼行為がなされているのだ。

《時間経過に伴う不可逆な不可視化》

上記のような儀礼のタイミングからは、想知領域の力の作用を見守りつつ葬送のプロセスを管理した様子が見てとれる。その過程では当然、時間の経過と、それに伴う緩慢な変化が意識されただろう。

第6図は、廃絶遺構凹地と集落外縁の斜面を示したものである。それぞれの落ち際に面の縁として内部と外部を区画してはいるものの、フラスコ形土坑のような形態上の不可視部はほぼ持たない。落ち際の縁による遮蔽は限定的であり、観察点の移動によって可逆的に全体像を把握できることから、構造的には不変項と見なされ得る存在である。だがここにも不可視化の現象が観察される。それは流入土の累重による面の遮蔽（被覆）である。

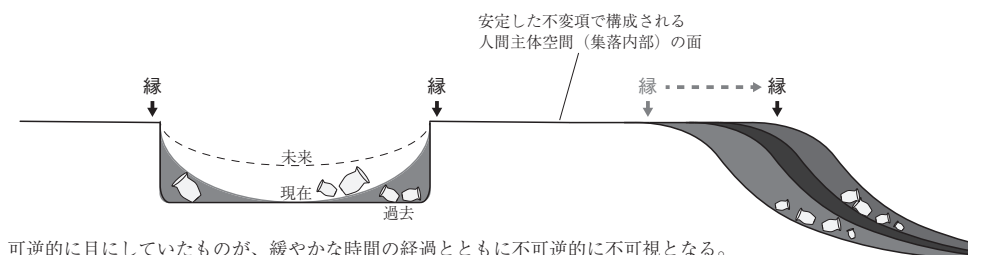
凹部の内側や斜面の下方が堆積土に覆われる現象は、ありふれた物理的な自然の作用である。しかし視覚情報に変化が生じるスポットとしてみれば、不変項で構成される安定した集落内部の環境においては際立った「変化項」となる（註5）。堅穴住居の跡地を例にとれば、見えていた床面は壁際から順に流入土に覆われ次第に見えなくなっていく。集落外縁の斜面に投げ込まれた土器等の遺物も同様に時間の経過に伴い徐々に隠されていく。「過去」が地下に飲み込まれていくところなのだ（註6）。

このように、基本的には不可逆的な不可視化が進行し、ときには流水や崩落によって突如「過去」があらわになるような場所は、人々に想知領域との連関を強く意識させただろう。集落外縁の斜面はその外に広がるバッファゾーンの波打ち際であり、また廃絶遺構凹地は想知領域と通ずるワームホールの入口に生じた局所的なバッファゾーンなのである。先述したフラスコ形土坑跡の小凹地もまた、埋没の結果不可視部が無くなった後も、結界である開口部周縁とバッファゾーンとしての内部、そしてその下部にあるワームホールは継続的に意識され、後続の葬送関連遺構を引き付ける核としてその意味を維持したと考えられるのである。

集落内環境における視覚的な不変項と、存在としての不変項である想知領域とを画する結界付近には、想知領域の営力の作用を見ることが出来る「変化項」としてのバッファゾーンが存在するのだ。

《可視⇔不可視、明⇔闇、覚知⇔想知》

以上から、覚知領域と想知領域は、視覚情報においては可視と不可視の対向関係にあることがわかる。そして両者の間には、「見えそうで見えない」「見えなかったところがぼんやりと（ちらりと）見える」「見えていたものが変形する」など、視覚的に不安定で曖昧な部分が介在し、これが完全不可視部としての想知領域の存在を匂わせているのである。



可逆的に目にしてはいたものが、緩やかな時間の経過とともに不可逆的に不可視となる。
不変項が崩れ変化項となる地点が凹地や斜面。
それぞれの落ち際は、面の変換点（「面の縁」）である。
見えなくなったものの行先は「不可視の不変項」として位置付けられた「想知領域」。
移行する段階は、対象が地中に潜る（沈む）ように見られたか。

第6図 土層の被覆遮蔽による不可逆的な不可視化

遮蔽によるケースを除くと、可視と不可視の関係は、十分な光量のある「明」と真っ暗な「闇」との関係に置き換えることができる。この場合に、両者の接点において曖昧で不安定な部分となるのが「暗部」そして「影」である。ギブソンは、知覚システムが十分な情報を受け取れない場合、代案を立てたり、妥協したりして、わずかな情報をもとに意味を成すものにしようとする、と述べている(佐々木他監訳 2011, p.349-350)。彼のこの記述は、知覚の仕組上、特定の条件下において生じる錯覚等を説明したものであり、不用意な短絡は慎むべきだが、筆者は想知領域の物語が紡がれる舞台効果として、視覚情報を不安定にする暗部や影が重要な役割を果たしたと考える。「明」は覚知領域、「闇」は想知領域、その間にあるバッファゾーンが「暗部と影」という図式である。

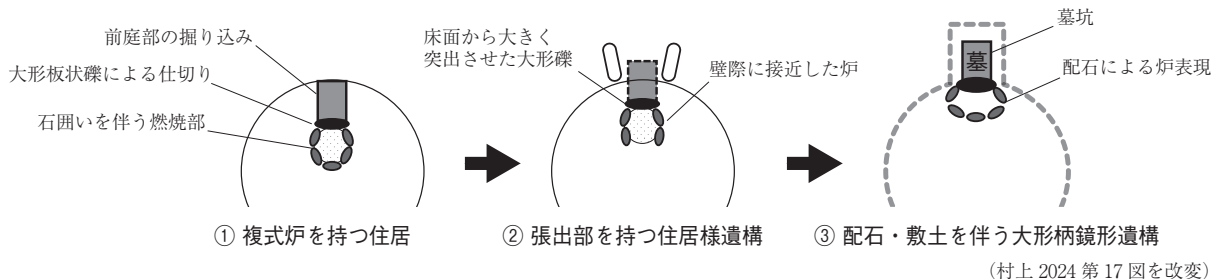
(4) 想知領域と付き合う装置

筆者は前稿において、複式炉前庭部に想知領域へ通ずるワームホールの機能を想定し、ここに柄鏡形遺構の張出部が融合して、同様の機能が継承・強化された可能性を指摘した(第7図)。この際、炉燃焼部と前庭部相当空間との間に設置された大形の板状礫を、結界となる「壁」と説明したが、儀礼装置として具体的に機能する状況を検討できていなかった。炉に炎が立ち上がると周辺の空間はどうなるのか。光の情報が作り出す構造と意味を考えてみたい。

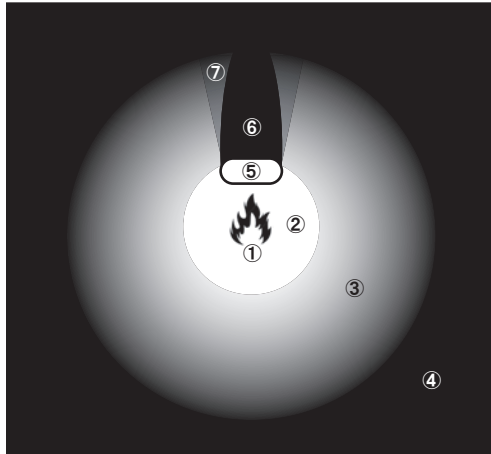
環境の包囲光の源となる太陽は地平を規則的に往来し昼夜を分けている。太陽が沈むと想知領域の「闇」は限りなく接近しこれに包囲される。その闇にあって、照明されたわずかな空間の確保を可能にするのが「炎」である。灯火としての炎は、それを用いる場所・規模・時間を、人間側の意図にあわせて調整できる。同時に明部とのコントラストをなす影(暗部)が作り出される(註7)。

第8図は、光源としての炉の周辺に展開する光の構造を模式化したものである。炉の炎①が放射する光はごく近い範囲を直接照らして限定的な明部②を作る。反射散乱した光が包囲光となり周囲は曖昧な空間③となる。光源から離れるほど光量は漸減し、視覚情報のない闇④へとつながる(上屋がある場合は壁や屋根が③-④間の物理的な遮蔽面となる)。以上の基本的な光の構造の中に遮蔽面となる対象物⑤(ここでは大形礫)を置くと、「放影」⑥が出現する。放影の面の縁(輪郭)には曖昧な「半影部」⑦が生じる(註8)。

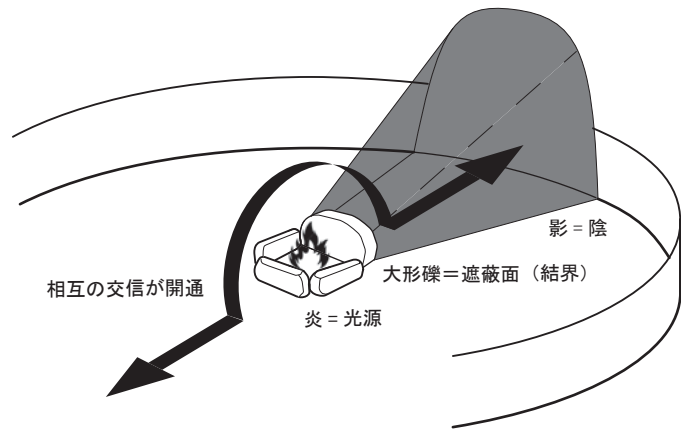
このような空間内の光の構造から見ると、不可視の存在である想知領域を暗示する「暗部や影」は、意図的に演出されたものである可能性が高いと考えられる。第9図に示すとおり、大形礫の背後の放影は施設本体の出入口方向に延びて、不可視部である想知領域(外部の闇や地下)に連続する(註9)。放影の中心部は、炎およびその直近の明部とのコントラストによって限りなく闇に近い暗部となり、影の縁は覚知領域との境界を曖昧にする半影部となる。炎の揺らぎは半影部および周辺の不安定な包囲光配列をより流動化させ、明部すなわち覚知領域にある自己と、不可視の闇にある想知領域との両極を際立たせただろう。制御可能な炉の炎を光源として、不可視部の存在を知覚させるアフォーダンスを意図的に複合・増幅させるようデザインされた儀礼空間が設けられていたと理解できるのである。



第7図 前庭部相当空間の突出過程—芋田沢田Ⅳ遺跡の事例—



①光源（炉の炎） ②明部 ③曖昧な包围光 ④闇
⑤遮蔽面（大形礫） ⑥放影（暗部） ⑦半影部



第8図 炉周辺における光の情報の構造 第9図 炉を光源に不可視部を強調した儀礼空間の演出

(5)「怖れ」から「畏れ」に、そして利用へ

ここまでの検討で、筆者が前稿において想知領域への「漠然とした生理的不安」としたものの正体が、生態心理学でいう「負」のアフォーダンスであることが分かった。そして、想知領域という不可視の存在を暗示するアフォーダンスは遮蔽の構造と闇に潜在するものであること、相互の間合いが徐々に詰められていく過程でアフォーダンスが複合化・多義化し物語が充実したこと、多義化によって「正」のアフォーダンス（利用可能性）が併せて見出されるようになったこと、「負」を退け「正」を得るために想知領域との交信（儀礼）装置が整備されていったこと、が理解できた（註10）。

このような想知領域の制御は、炉を装置とした儀礼以外にも見受けられる。例えば先掲第4図のような形態上の遮蔽による部分的な不可視部を持つ対象は、開口部の開閉によって容易に管理できる。ワームホールに扉を付けるようなものだ。いずれも日常用途にも用いられる対象であり、また内部の視認は必ずしも不可能ではない。だがこれらは儀礼上の意味を与えられたときを境にその機能を発揮しはじめる（註11）。人が任意に意味を与えようという事実がすでに制御可能な対象であること示しているのである。また、第6図のような自然堆積層の被覆による遮蔽にも、土砂の投入等による意図的な介入（いわゆる盛土遺構等の形成）が認められる。時間の流れに任せていた土層の堆積に能動的に介入し、被覆を促進させようとする（時計の針を進めようとするような）意図が込められていると筆者は推測する（註12）。

以上のように想知領域と主体的に向き合う術が充実するのに伴って、集落外のバッファゾーンへの進出もまた加速していったと考えることができるだろう（資源獲得のための陣地や道路網などのスポット的な人間主体空間の拡大、低標高地（沖積地）への居住地の展開等）。人類は「環境が人間にアフォードするものを変えるため」に「環境の形や物質を変えてきた」、そして「人類に資するものをいっそう有効に」し、「害となるものをより抑えてきた」とギブソンはいう（古崎他訳1985,p.140）。環境に潜在するアフォーダンスを見出し、それらから得られる多角的な「意味」のうちから、選択しあるいは複合させて「特定の」形態に仕立てていくという点が、人間と他の動物とを区別する。想知領域とどう向き合ってきたかという問いは、人間が人間として環境といかに切り結んできたかを考えることと同義であると言って良いだろう。

2 レジリエンスとしての集住と分散

(1) 自我〔帰属意識〕の共有から個別化へ

想知領域との向き合い方は、物語の成熟と儀礼様式・儀礼装置の充実とともに変遷してきたことを述べてきた。この過程において想知領域に対する緊張は次第に緩和し安定して、環境に対する主体的な働きかけが促進されていったと筆者は考えている。またこれに伴い、集団で共有していた帰属意識が徐々に解きほぐされ、意識の集合単位は「戸別」さらには「個別」に分化し、大規模集住を維持してきた紐帯は弛緩して分散化に至ったとの見解を前稿で示した。この変遷の過程を第Ⅰ～Ⅴ段階に区分し模式的に示したのが第10図上段（村上2024第25図, 改変再掲）であったが、概念図であり各段階の具体像が把握しづらいものとなっていた。この機会に再考し、以下に改めて説明してみたい。

(2) 災害時「被災地社会」の変遷過程との対比

多数の人間が肩を寄せ合って集団を形成する契機としてまず想起されるのは、外的脅威にさらされた時であろう。本稿で類推の対象にあげるのは、災害時の避難所等に成立する「被災地社会」である。

第10図下段は防災心理学が専門の木村玲欧が、発災から生活再建に至る過程を5段階に区分したものである（木村2015,p.77, 段階名を筆者改変「A～E段階」）。木村による各段階の概要説明は図中にあるが、筆者の理解を示すと次のようになる。Aは発災直後で未だ避難所に到達せず、個人や小集団がそれぞれに外的脅威にさらされている段階、Bは避難所に大勢が寄り集まり、集団で外的脅威（災害）と対峙する段階、Cは個々の世帯が複数集まった形ではあるが、集団全体が一丸となって外的脅威に起因する困難に向き合っている段階、Dは大規模な集団を運営するシステム（各種の役割分担や行政の窓口等）が内部に整うとともに、世帯ごとの自立性が高まりつつある段階、Eは外的脅威への怖れは落ち着き、新たな社会の創生のため各々の世帯が自立を目指し動き始める段階である。

筆者が第10図上段に想定した縄文時代における各段階と、被災地社会の変遷を対比してみると、図中に結線で示したとおり、極めて類似した経過をたどることが分かる。よって被災地社会のシステムとその過程における意識の変遷から、縄文時代の各段階の有り様を類推する示唆を得ることができる。なお本稿では、両者の対応関係をより明確にするため、縄文時代の変遷過程に、大規模集住形態となる前の「第0段階」を追加した。以降の第Ⅰ～Ⅴ段階については、図最上段の表（再掲）に示した概要および前稿を併せて参照されたい。

まず第0段階は、発災直後のA段階に相当する。「負」のアフォーダンスが点在する地雷原のような領域にあって未だ確固とした人間主体空間は確保されず、個人や小集団が「ウチーソト」よりも「自－他」の意識を強く持ち、各々に環境と対峙している状態を想定したものである。「自助」のみの段階ともいえる。つづく第Ⅰ段階は、被災地社会のB段階に相当する。それぞれに避難した人々がまずは避難所にたどり着いた段階である。ここから集団による「共助」の社会が形成されていく。

次に第Ⅱ段階。大規模な集住が始まると縄文時代においては長くこの状態にあったと考えられる。被災地社会ではC段階に相当し、複数世帯が協働し全体で集団を維持運営する。「災害ユートピア」（註13）と呼ばれるこの段階には「一種の平等主義社会が生まれて…助け合いのコミュニティが形成される」（西村2019）。一般に縄文社会を「理想郷」視するイメージは、このような「共助」の社会の姿だろう。だが、B.ラファエルはこのような「愛他的・相互扶助的な」段階を経て高度の適合状態である「ハネムーン期」を過ぎると、その後「幻滅」の局面が現れることを指摘している（石丸訳1989）。「ユートピア」を特徴づけるのは、共通の価値基準に基づく平等性と安定性だが、個々がその枠組みから逸脱することを許さない没個性の社会でもある（高橋2008, 長江・星2011）。縄文人の個性を論じることは目的としていないが、戸別・個別の自我を胚胎していた段階と考えてみてはどうか。

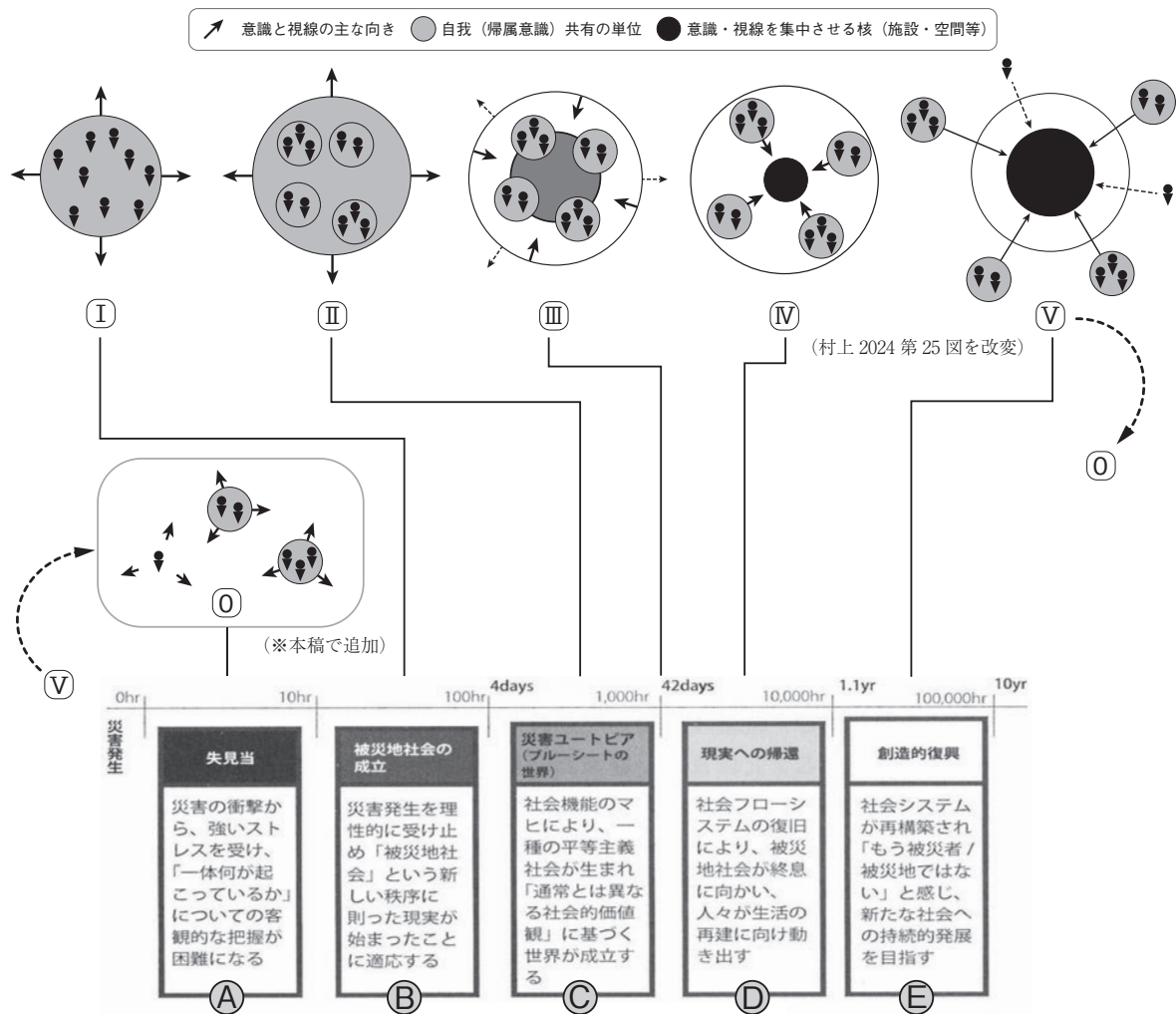
前稿で筆者が「戸別単位の帰属意識も徐々に高まっていった」としたのがこの段階である。

第Ⅲ～Ⅳ段階に対応するD段階は、ライフラインの復旧や仮設住宅の整備、行政サービス等が始まる段階である。これまでの自助・共助に「公助」が加わる。集団運営のシステムが確立し、その中核に行政が位置付けられる。要望は内部に設置された窓口に届けばよい。外に向けられていた助けを求める声はこの段階には内向きに転ずるのである。またそれまで他者にも平等に向けられていた被災者の視線は自身と家族に回帰する。将来を見据え戸別の結束が固められる段階である。

図示のとおり第Ⅲ段階はC－D段階の移行期にあたる。前稿ではこの段階に「住居（家屋）の中からは儀礼機能に特化した施設も現れ始めただろう」とした。行政との橋渡しを引き受ける世話人（の家）のような存在とイメージが重なる。いまだ共助の段階にあって、頼りになるのは隣人である。

これが第Ⅳ段階に入ると「空間内に集団儀礼の核となる専用儀礼施設が設けられ」、「集団統合の役割をこの施設が担う」ようになる。そして「各戸の意識」は「儀礼上の核に向けられる」ようになり、

段階	意識・視線の向き	自我（帰属意識）の単位	背景・要因
I	外	集団（個の集合体）	ウチーソト意識が主体。人間主体空間の確保。
II	外	集団（戸別意識の高まり）	集団の儀礼とともに戸別儀礼の様式の整備が進む。
III	内・外	戸別単位の集合体としての集団	儀礼機能が充実した住居からなる儀礼空間が形成される。
IV	内	戸別（各々の意識は核へ）	儀礼様式の体系化が完成。儀礼空間の頂点（核）の設置。
V	内	戸別・個(?)（集合体意識の弛緩）	儀礼の形式（形骸）化。自我単位の細分化→自由化。



災害過程における5つの段階（木村 2015）

第 10 図 外的脅威への対応と意識の変遷過程－被災時における集団態様の変移との対比－

「戸別単位の自我はより内向き（独立的）に強められていった」。上述した被災地社会D段階の姿と重なるのである。

最後の第V段階に対応するのがE段階である。「もう被災者ではない」と感じ、それぞれの新たな住まいと街づくりが始まる。行政が本格的に復興の中核として機能し、「公助」のもとに個々の自立が進む。またこれと並行して「共助」の仕組みと交流の場の維持が求められる段階でもある。縄文時代の第V段階には、「共有する儀礼施設・空間が確立し、集団的な儀礼の場かつ統合の象徴として機能する」。そして「自我の単位は戸別、さらには個人レベルに細分化」し、「大規模な集住形態を維持する意識は徐々に希薄になっていった」と筆者は考えている。

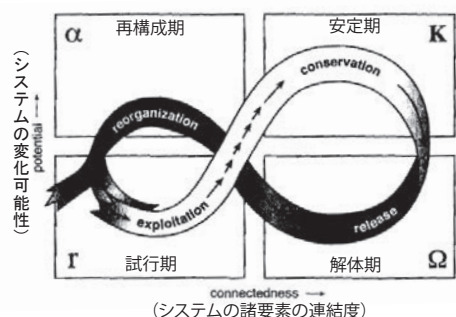
以上のように、前稿で想定した縄文時代の集団の形と意識の変遷過程は、被災地社会が実際にたどる経過と良く合致し、ここから各段階の集団の具体像が浮かび上がってくるのである。

(3) [想知領域=環境] と向き合うレジリエンス

被災地社会がたどる過程と一致する第0～V段階の流れは、脅威と対峙し環境に適応してきた長期にわたる「レジリエンス」の過程と見做すことができる。覚知領域に表出するあらゆる事象を想知領域の影響によるものと理解する縄文人にとって、対峙・調和すべき相手としての想知領域とは、「環境」そのものであると言って良い。よって彼らが「環境に生きる」こととは、想知領域との関係性を調整し続ける過程なのであり、想知領域を相手にするレジリエンスにおいては、経済合理性に優先する精神性（理念）に基づいた意識が、主要な部分を占めていたと考えるべきだろう。

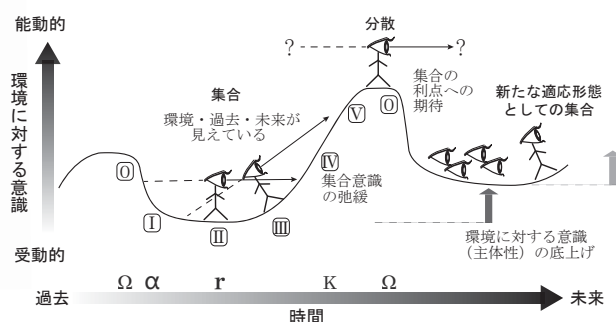
第11図はC.S. ホリングらが示した適応サイクルのモデルである（Holling & Gunderson 2002）。システムは[r] 試行期→[K] 安定期→[Ω] 解体期→[α] 再構成期の4段階を経て、次のサイクルへ移行する。試行期～安定期はゆっくりと、安定期～解体期にかけては急激に遷移するとされている。このサイクルは、時空間が異なる複数の組合せからなり（「適応サイクル複合」;Panarchy）、大小の無数のサイクルが「入れ子になったり相互に影響しあうという状況が想定される」（羽生 2023）。また、大スケールの安定期の「在来知」等がより小スケールの再構成期にレジリエンスの向上をもたらしたり、小スケールの解体がより大スケールの解体までをも引き起こしたりする関係にある。

このモデルを下地に、第0～V段階における意識の変遷を想定したのが第12図である。図左から右へ進む時間に沿って、環境に対する人間側の主体性の強度の起伏を表している。左端の第0段階は上のモデルの[Ω]に相当する。その時点におけるシステムの頂点に達するが、結果として環境との調和に乱れが生じ、次の第Ⅰ段階[Ⅰ: α]で新たなシステムが再構成される。第Ⅱ段階は[r]に相当する。羽生淳子によれば、小規模なシステムが小さな変化を重ねつつ長く試行期[r]にとどまる形は、レジリエンスが高い状態であるという（羽生 2023）。縄文時代において一定規模の集住形態が長く続いた期間がこの段階にあたるだろう。環境に対する態度は概ね抑制的であることにより調和が保たれている。ここで蓄積された在来知をもとに、その後の環境へのアクセスは徐々に能動的になっていく



(Holling & Gunderson 2002 より、羽生 2023 を参考に加筆)

第11図 適応サイクルのモデル



第12図 意識の変遷に伴う集合・分散

(第Ⅲ・Ⅳ段階：K)。「安定期」というよりも充実・発展の時期に位置付けられるだろう。だが一方で人間側の主体性の高まりが、環境との調和を乱す諸要素を蓄積させる段階でもある。そしてこのシステムの頂点（第Ⅴ段階）に達すると、環境との相補性も、在来知の本質も、目指すべき道標も、あたかも迷子になったかのように見失ってしまう。ここに至って再び、新たな適応形態の再構成が必要とされる段階に進んだと考えられるのである。

羽生は、再構成期の段階にあるシステムの方が長期的には柔軟に変化するポテンシャルを有するとも指摘している。図に示したように、環境に対する意識は起伏を繰り返しながらも、レジリエンスが高い[r]～[K]段階（意識の起伏の谷）における人間側の主体性は、リセット（再構成期；a）のたびに徐々に底上げされていったと考えられる。筆者は、想知領域との関係性の深化に伴い、大規模に共有されていた帰属意識が解体していったとの主張を繰り返してきたが、第Ⅴ段階の分散化は衰退ではなく、物語や儀礼様式の成熟を経て、環境にある「正」のアフォーダンスから集団の生存に資する可能性を導き出し、柔軟に適応してきた最終段階の姿なのであり、それまでに蓄積された在来知・伝統知は新たな適応形態を下支えする基盤ともなったのである。

前稿・本稿では、芋田沢田Ⅳ遺跡事例を大サイクルにおける第Ⅲ～Ⅳ段階に相当するものとしてきた。だが時空間の異なる大小の適応サイクルが入れ子状に複合して歴史が形成されていくことを考えれば、中期末葉～後期前葉に限定される本遺跡においても、この間に完結した一つの小サイクルを想定しなくてはならない。羽生は、当該期における集落規模の拡張や人口増減は、地域ごとの差異が大きく、広域をひとまとめに論ずることは適切でないと指摘している。遺跡ごと・地域ごとの小・中の適応サイクルの復元と、これらの横方向の連関を解明することがまずは重要な課題であり、個々の考古学的事実を有機的に結びつけるのに不可欠なのが「レジリエンス」の観点なのである。

おわりに

アフォーダンスとレジリエンス。筆者にとって敷居の高い理論ではあったが、人間の有り様を解明しようとする考古学との親和性が極めて高いことを、今回の検討を通し改めて実感した。社会不安が急速な集団化をもたらし、集団による社会が安定すると個別多様化が進み、結果、分散・孤立して新たな社会不安が蔓延することを繰り返す様は、人間の意識の根本に由来するものなのだろう。多様性世界の迷子となっている現代の我々は、すでに「第0段階」に足を踏み入れているのかもしれない。新たな適応サイクルへの移行に向け、心のレジリエンスを如何に底上げさせられるかが問われている。

本稿の試みは、結果、前稿の舟底の孔をさらに掘げたかもしれない。無自覚な不備や誤謬は無数にあるものと思われる。厳しいご指摘とご教示を得て、引き続き孔を塞ぐ手立てを模索していきたい。

謝辞 本稿作成に際し濱田宏・村木敬・村田淳の各氏より多くの助言を賜った。末筆ながら記して感謝申し上げます。

〔註〕

- 1 菅野修広はアイヌ文化期の送りの場としての「くぼみ」を検討し、「あの世の入口の象徴」である可能性を指摘している（菅野 2013）。想知領域とワームホールの概念や、物語による裏打ちなど、筆者の想定した縄文時代の他界観とよく合致する。
- 2 遮蔽縁は「廊下のL字の角、断崖の絶壁、丘の端、地面の穴のヘリなどにみられる」（古崎他訳 1985,p.87）。
- 3 移動して遮蔽縁をかわせばその後ろに続く別の面が見え、元の視点に戻ればまた見えなくなるということ。
- 4 「探索的移動によって景色が整然となると、…生息環境全体の不変的構造がとらえられ」、「隠れたものと現れているものが1つの環境となる」。また「自分の視点では隠れているが他人の視点では現れている面を知覚」できるのであり、「すべての者が同じ外界を知覚できる」。公共的認識についてギブソンは以上のように説明している（古崎他訳 1985,p.214 - 215）。後述のように想知領域が不変項の一つに位置づけられるなら、同様にその存在の確かさは共有されたであろう。
- 5 「変化しないもの（不変項）」を背景として「変化するもの」が際立ってくる過程を、動物は知覚するのである（河野・田中 2023,p.25）。

- 6 「動物は、その動きに見合った時間的規模で変化する「事象（event）」を環境の中に知覚する」（河野・田中 2023,p.24）。凹地や斜面下方が次第に土に覆われていく様は、人間という動物にとっての「時間的規模」においては、緩慢であるにせよ確実に進行することを知覚できる事象である。
- 7 「エコロジカルな情報は環境のエネルギー場のコントラストの配列にある」（細田訳 2000,p.106）。
- 8 「放影」（影）は「照明に向く表面上に、その表面と放射源との間に立ちただかるもの」が作り出すもので、「方向性を持つ照明が、拡散する照明より強ければ作り出される」。「放影の形態は対象の形の幾何学的投影である」。影が色やシミとは異なるものとして特定されるのは、端（縁）に「半影部」を伴うためである（佐々木他監訳 2011,p.243）
- 9 複式炉では前庭部の開口部が遮蔽縁となって凹部の内側に放影が生じる。開口部は物理的に遮蔽（蓋が）されている可能性も考慮する必要がある。
- 10 前稿で「怖れる」→「委ねる」→「頼る」→「利用する」の順に整理した遷移の過程と同義である。
- 11 仏壇や神棚の購入に際しては外観と価格を気にするだろうが、据え付けられ機能しはじめた途端、恭しく扱われるのと同じだ。切断蓋付土器は内容物を納めるために物理的にいったん解放され、閉じられてから意味が与えられただろう。多様な儀器に施される赤彩もまた意味を宿すことを示す記号（D.A. ノーマンのいうシグニファイヤ（岡本他訳 2015,p.17））であろう。
- 12 想知領域へ円滑に到達させるため、不意にあらわになった「過去」を想知領域に送り返すため、等の理由が考えられる。
- 13 ソルニットの著書の邦題（高月訳 2020）。原題は "A Paradise Built in Hell"。

〔引用・参考文献〕

〈アフォーダンス理論関連〉

- 岡本 明・安村通晃・伊賀総一郎・野島久雄 訳 2015『誰のためのデザイン？－認知科学者のデザイン原論 増補改訂版』新曜社
- 《Norman,D.A. 2013 THE DESIGN OF EVERYDAY THINGS: Revised and Expanded Edition, New York: Basic Books.》
- 川村久美子 2001「アフォーダンス理論がもたらす革命」『武蔵工業大学環境情報学部情報メディアセンタージャーナル』2
- 河野哲也・田中彰吾 2023『知の生態学の冒険 J・J・ギブソンの継承9 アフォーダンス そのルーツと最前線』東京大学出版会
- 古崎 敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬 旻 訳 1985『生態学的視覚論』サイエンス社
- 《Gibson,J.J. 1979 The Ecological Approach to Visual Perception, Boston :Houghton Mifflin》
- 佐々木正人 1996『知性はどこに生まれるか－ダーウィンとアフォーダンス－』講談社現代新書
- 2000『知覚はおわらない－アフォーダンスへの招待－』青土社
- 2015『新版 アフォーダンス』岩波科学ライブラリー 234 岩波新書
- 佐々木正人・古山宣洋・三嶋博之 監訳 2011『生態学的知覚システム－感性をとらえなおす－』東京大学出版会
- 《Gibson,J.J. 1966 The Senses Considered As Perceptual Systems, Boston :Houghton Mifflin》
- 柴田 崇・野中哲士・佐古仁志・原島大輔・青山 慶・柳澤田実 訳 2021『生きていること 動く・知る・記述する』左右社
- 《Tim Ingold 2011 BEING ALIVE: Essays on Movement, Knowledge and Description, Routledge》
- 細田直哉 訳・佐々木正人 監 2000『アフォーダンスの心理学』新曜社

《Reed,E.S. 1996 Encountering the World: Toward an Ecological Psychology, Oxford University Press.》

〈レジリエンス関連〉

- 石丸 正 訳 1989『災害の襲うとき－カストロフィの精神医学－』みすず書房 《Beverly Raphael 1986 WHEN DISASTER STRIKES: How Individuals and Communities Cope with Catastrophe, New York :Basic Books Inc.》
- 稲村哲也・山極壽一・清水 展・阿部健一 編 2022『レジリエンス人類史』地球研学術叢書 京都大学学術出版会
- 上山真知子・J . F .モリス 訳 2020『発達とレジリエンス－暮らしに宿る魔法の力－』明石書店
- 《Ann S. Masten 2014 ORDINARY MASIC: Resilience in Development, New York :Guilford》
- 木村玲欧 2015『災害・防災の心理学－教訓を未来につなぐ防災教育の最前線－』北樹出版
- 須川綾子 訳 2013『レジリエンス 復活力－あらゆるシステムの破綻と回復を分けるものは何か』ダイヤモンド社
- 《Andrew Zolli and Ann Marie Healy 2012 RESILIENCE: Why Things Bounce Back, Free Press》
- 高月園子 訳 2020『定本 災害ユートピア－なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか－』亜紀書房《Rebecca Solnit 2009 A PARADISE BUILT IN HELL: The Extraordinary Communities That Arise in Disaster, New York :Viking》
- 奈良由美子・稲村哲也 編 2018『レジリエンスの諸相－人類史的視点からの挑戦－』放送大学教育振興会
- 西村英伍 2019「生態心理学的分析を用いた災害避難所におけるレジリエンスデザイン方法の構築」九州大学 博士論文
- 羽生淳子 2023「東日本縄文文化のレジリエンス」何が歴史を動かしたのか 第1巻 自然史と旧石器・縄文考古学』雄山閣
- Holling,C.S. & L.H.Gunderson 2002 "Resilience and adaptive cycles," In L.H.Gunderson & C.S.Holling (eds.) Panarchy, Washington D.C., Island Press,

〈その他〉

岩手埋文（公益財団法人 岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センターの略）

2002『清水遺跡発掘調査報告書』岩文埋報第382集（岩文埋報は岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書の略）

2013『芋田沢田Ⅳ・芋田沢田Ⅵ遺跡発掘調査報告書』岩文埋報第604集

菅野修広 2013「あの世の入り口とくぼみの世界観－アイヌ文化期におけるくぼみでの送り儀礼の意味－」『北海道考古学』49 北海道考古学会

高橋在也 2008『『ユートピアだより』再考－労働における精神の自由について』千葉大学大学院人文社会科学科研究プロジェクト報告書 156『身体・文化・政治』

長江弘晃, 星昇次郎 2011「ユートピア展望－ユートピアの原点、そして現在から未来へ」『佐野短期大学研究紀要』22

村上 拓 2024「縄文時代中－後期移行期の葬制にみる二元性と空間認知－盛岡市芋田沢田Ⅳ遺跡の廃絶遺構凹地と柄鏡形遺構の検討から－」『紀要』43（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター